
バレンタインは一色じゃない

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインは一色じゃない

【Nコード】

N6089D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

風変わりな少女麻紀子。恋人の彰浩にバレンタインチョコをプレゼントするが何とそれは。チョコレートは黒いものばかりではありません。

第一章

バレンタインは一色じゃない

綾波麻紀子は少し変わった女の子だ。色黒で目が大きいのは少しインド人に見えるが髪がストレートなので日本人らしくも見える。外見も少し特徴があるがそれ以上に特徴的なのはその性格であった。人と違うことをしてみたいと考える性格なのだ。言うならば変わり者なのだがそれでも外見が結構いいので許されている。そのせいで彼氏までいる。

「実はさ、気が利いてしかも親切なんだぜ」

その彼氏の丹羽彰浩の言葉だ。彼の仇名は五郎左というがこの仇名の由来は彼の苗字に由来する。織田信長の家臣の丹羽長秀の名前がそれだったからそうなったのだ。何か古風だと思うが何分有名な人間なので悪い気はしていない。だが麻紀子はその仇名では呼ばないのであった。

「そんなので呼んでもちつとも面白くないわ」

「面白くないんだ」

「だから私は普通に呼んでるのよ」

「丹羽君って？」

「オーソドックスもかえって変わったものになるのよ」
「だからこう呼んでいるというのだ。」

「わかるかしら」

「わかるけれどさ」

彰浩はそれに応える。しかし今一つ釈然としなかった。

「この前の話だけねど」

「ああ、あれね」

ふと思い出したように彼に伝えてきた。

「楽しみにしておいてね」

「バレンタインだよ」

彰浩はかなり心配していた。それは何故かというと彼女がチョコレートを買ってくれるかどうか甚だ疑問だったからだ。疑問というよりは不安で仕方がなかった。

「チョコレート、だよね」

「当たり前でしょ」

麻紀子の言葉は何を言っているのよ、とあからさまに含んだ感じであった。

「チョコレートよ。それは安心して」

「だったらいいけれど」

「楽しみにしていて」

そのうえで彰浩に対して笑ってみせるのであった。

「とびきりのチョコレートをプレゼントしてあげるから」

「とびきりなんだ」

「そいじよそこいらのチョコレートなんかめじやないわよ」

またしてもおかしいことを考えているのがわかる。何しろ麻紀子は普通のことをするのが、人と同じことをするのが何よりも嫌いなのだ。何かするのにつけてもそうなのだ。だからこそ彰浩は不安で仕方がないのである。

「この世に二つとないチョコレートだから」

「そうなんだ」

本音を言えば普通のチョコレートでもいい、彼はそう考えていた。何しろ彼女から手作りのチョコレートを貰えるだけで幸せな話だ。

それでどうして贅沢を言うのか。贅沢を言えばそれこそこの世の男の全てを敵に回すと言っているいい話だ。世の中何かとバレンタインに対して特別な感情を抱く男もいる。もっとも例外はあるもので男から貰う男やバレンタインに自分でチョコレートを買ってそれで赤ワインを飲む男もいる。変わった人間もいることにはいるが。

「楽しみにしていて」

「やっぱりあれ？」

絶対違うと思いいながらも言うのであった。

「ハート型のチョコレートかな」
バレンタインの定番であった。

「ホワイトチョコで文字を書いて」
「そんなの全然普通じゃない」

やはり麻紀子は違っていた。それは普通だと一言で切り捨てたのである。

「絶対にしないから。安心してね」

「そうなんだ」

「といつてもケーキでもドーナツでもないわよ」

それは保障してみせるのであった。

「絶対にね」

「そうなんだ。じゃあそれは期待しておくよ」

「絶対に期待していてね」

「こうまで言ってきた。」

「凄いのプレゼントしてあげるから」

「うん」

満面に如何にも楽しげな笑みを浮かべる麻紀子に対して彰浩は顔の裏に不安で仕方がない素顔を見せていた。とにかく不安で仕方がなかったがそれを言うわけにはいかなかった。言つてどうにかなるものでもないからだ。なればどんなにいいものか。こうも思うがそれも言うことができないのであった。

第二章

とにかくバレンタインが不安だったが。カレンダーは何があつても進んでいく。彰浩は次第に運命の日が近付いてくるのを見ながら不安に苛まれるのであつた。

「バレンタインが怖いみたいだな」

「怖いよ」

自分の部屋でクラスメイトに携帯で電話をする。部屋着に着替えてリラックスしている筈だがその顔も声もリラックスとは程遠いものであつた。

「だってさ、麻紀子ちゃん何するかわからないし」

「だよな。何か御前そのことすらも中々言えないだろ」

「うん、そうだよ」

そのことを相手に対して述べてみせた。

「だってさ。やっぱりバレンタインに」

「彼女からチョコレートを買えるのはそれだけでかなり幸せだぞ」

クラスメイトもそれを言うのであつた。やはり誰が見てもこうであつた。

「それはわかつているよな」

「わかっているよ。だからさ」

彰浩もそれに応えて言う。

「御前に言ってるんだろ」

「彼女持ちの俺にか」

「そうだよ」

それをはっきりと言うのであつた。

「他の奴に言ったらそれこそ」

「バレンタインの前に死ぬな」

そういうことであつた。彼女がいない相手にとってはこんな話は夢物語だ。それを話せばただでは済まないのは言うまでもないこと

である。

「それも確實にな」

「だから言えないんだよ。困ってるんだよ」

「中に何が入っているかとかか？」

「うん」

その不安もあつた。

「ボンボンとかそんな有り触れたものじゃないよね」

「タラコとかか？」

間違つてもチヨコレートには入れないものである。

「あと梅干とか小豆とか」

「それで済めばいいけれど」

もつと凄いものが入っているかも知れない、彼はそう思つのだつた。

「椎茸とか塩辛とか」

「想像しただけで食欲がなくなるな」

「けれど有り得るよね」

それが問題なのだ。

「実際に」

「可能性は高いな」

彼もこう言葉を返すのであつた。

「その程度はな」

「その程度だよ」

それもまた問題であつた。

「もつと凄いものになるかも」

「何キ口もあるチヨコレートとかな」

今度は大きさについて言及された。

「それが等身大のチヨコレートとか」

「まさか」

「いや、普通にあるでしょ」

しかし彼はその可能性を捨ててはいなかった。

「全然普通に」
「彼女だからなあ」
「有り得るよ、本当に」
本気でこれも危惧していた。何が起こってもおかしくはないと思
っているのだった。それを隠すこともどうしてもできないのであっ
た。
「本当にさ、何が起こってもね」
「覚悟を決めるしかないな」
「クラスメイトもこう言うしかなかった。」
「やっぱり彼女がいるだけ凄くいいことだしさ」
「そう考えるしかないんだ」
「そういうことさ。わかつたら」
念を押すように言われた。
「ここは腹を括ってね」
「わかつたよ」
彼も観念した声で頷くのであった。
「それじゃあここはね。何が起こっても」
「驚かないで受け止めるんだな」
「こつも言われた。」
「折角彼女からバレンタインのチョコレートを貰えるんだからな」
「わかつたよ。それじゃあ」
「ここまで言われて遂に完全に腹を括って頷いた。」
「楽しみにしておくよ」
「ああ、それじゃあな」
「バレンタインに何貰ったかはその時に言うから」
「ああ、それはいいさ」
だがそれは断られるのだった。

第三章

「いいんだ」

「いいさ、それには及ばないさ」

「こつも言われる。」

「それはまたどうしてなんだい？」

「すぐにわかるからだよ」

「これが答えであった。」

「御前がどんなチヨコレート貰ったかはな。何しろ麻紀子ちゃんも有名だしな」

「理由はそれなんだね」

「それ以外に何があるんだよ」

「言葉がやや、いやそれどころかかなりクールなものになった。」

「ないだろ？そういうことさ」

「わかったよ。じゃあどんなチヨコレート貰ったのかは楽しみにしておいてくれよ」

「期待はしているさ」

「といつてもそれは普通にあるような期待ではない。お化け屋敷に入つてそこに何があったのかを聞くような、そうした期待なのである。そうした類の話であった。」

「それもかなりな」

「じゃあ期待だけしておいてくれよ」

「彰浩もそれはわかつておいているがあえてそこまでは言わないのであった。」

「じゃあまたな」

「ああ、お休み」

「ここまで話して電話を切る。それで終わりであったが彰浩はあらためてカレンダーを見る。やはり時間は十四日に少しずつでも近づいているのであった。」

「どうなるやら」

その日が近付く度に不安になっていく。一体どんなチョコレートを買えるのか。不安で不安で仕方ないがそれでも。どうあがいてもバレンタインデーは来るのであった。本当に腹を括るしかなかった。その頃麻紀子はお母さんとショッピングを楽しんでいた。買っているものは勿論バレンタインに備えてのものである。見れば色々を買っている。

「また随分沢山買ったわね」

「うん」

自分と同じ顔をしているお母さんに対して応える。見れば若作りで背も同じ位なので母娘というよりは姉妹に見える。もっと言ってしまうとクローンに見える程であった。

「彰浩君の為にね」

「その為に買ったのね」

「お母さんだってそうじゃない」

見ればお母さんもかなり買い込んでいた。言うまでもなくそのメインはチョコレートである。

「そんなの買って。やっぱり」

「女の子はね、麻紀子ちゃん」

お母さんはここで麻紀子に伝えて言う。

「こつしたことは許されるのよ」

「こつしたことって?」

「好きな人の為に何かを買うことよ」

それは許されるのだという。どうもいささか自分勝手な意見にも聞こえるが。

「それはいいのよ」

「バレンタインでもそうなのね」

「バレンタインにこそよ」

お母さんの持論であるらしい。自信に満ちた声で妹に語っていた。「買った方がいいのよ。っていうか買わなくてはいけないの」

「どうしてもなのね」

「そういうこと」

またそれを言う。

「お母さんもお父さんの為に」

「チヨコレート作るのね」

「まあ見ていなさい」

声に多分に含まれていた自信がさらに大きなものになっていた。

「凄いの作るから」

「普通じゃないのね」

「当然よ」

どうも麻紀子は外見だけでなくその考えもお母さんにそっくりであるらしい。何もかもをお母さんから受け継いだと言える程であった。

「普通のチヨコレートを作る位なら買ったのをそのまま出せばいいだけじゃないの？」

「そうよね」

麻紀子もお母さんの言葉に頷く。完全に同意であった。

「それ位なら」

「作るんなら特別なチヨコよ」

両手は荷物を持って塞がっているので動かすことはできないがその顔に満面の笑みを浮かべて言ってみせるのであった。

「だからよ。腕によりをかけてね」

「私も」

やはり麻紀子も同じことを考えて言うのであった。やはり完全にお母さん似であった。というよりは最早完全にクローンであった。

「彰浩君の為に特別のチヨコレートを作るわ」

「いい、麻紀子ちゃん」

お母さんの声がここで完全に真剣なものになる。

「何？」

「作るからには真剣勝負よ」

その真剣な声での言葉である。

「いいわね」

「ええ、勿論よ」

麻紀子も最初からそのつもりだ。彼女なりに手を抜くつもりは全くないのであった。

「凄いの作るんだから」

家に帰ると決意とその他のものを胸に秘めてチヨコレートを作るのであった。作りながらカレンダーを見るが彰浩とは全く違う見方になっている。

「見ていなさい」

誰かに対しての言葉であった。

「きつと凄いの作るんだから」

その誓いをあらたにして作り続ける。幾ら徹夜しても平気であった。そして運命のバレンタインデー。周囲の騒ぎをよそに彰浩は自分の教室の自分の席で憔悴しきった顔になっていた。

第四章

「いよいよ今日だな」

「そうだよな」

その憔悴した顔で友人達の言葉に応えるのであった。

「遂にな」

「それで御前のところのチョコレートは何なんだ？」

「貰えるだろ？」

「それは間違いさ」

これだけははっきりしていた。

「ただな」

「ただ？ああ、そうか」

「麻紀子ちゃんだからな」

「それを考えて最近全然眠れないんだ」

その憔悴した顔でまた述べる。憔悴は声にも出ていた。

「成程ねえ」

「鬼が出るか蛇が出るかか」

「鬼や蛇であつてくれればいいさ」

完全に本音の実に切実な言葉であつた。

「もつと凄いのが出るかも知れないからな」

「中に爆弾が入っているとかな」

「それも考えたさ」

考えていたのであつた。

「ダイナマイトとかな」

「何か阪神みたいだな」

「そうだな」

クラスメイト達はまたえらく古い話を出すのであつた。

「じゃあそのチョコ食ったらバックスクリンに一直線だな」

「それも三連発で」

「そうなるかもな、本当に」

これもまた本気で思っていた。

「今日のチヨコ次第でな」

「まあいいじゃないか」

「彼女から手作りのチヨコが貰えるだけでもな」

「それはわかってるさ」

バレンタインにおいてそれは最高位にあると言ってもいい。大抵はどうでもいいといった感じの義理チヨコであるし悪ければ貰えもしないからだ。バレンタインという日は男にとっても女にとっても実に色々なことがわかる日であるのだ。その色々わかるチヨコレートを平気で酒の肴にする変人はとりあえず置いておいていいのだが。

「だから。俺も」

「受けるんだな」

「ああ、受けることは受ける」

最初からそれは決意しているのだった。

「ただ。何が出るかと思うと」

「坊さんは呼んだか？」

つまりは葬式の用意ということであった。

「それが神父さんか」

「一応正露丸は用意してあるさ」

いざという時の備えは忘れてはいなかった。

「何かあつてからじゃ遅いからな」

「いい心掛けだな」

本当にそうであった。しかしそもそもハレの日であるバレンタインにそんなものを用意しなければならぬところに彰浩の苦勞が見て取れる。

「それでいけ。いいな」

「わかつてるさ。本当に何が出るか」

あらためて考える。

「怖くて仕方がないよ」

「その怖いのが来たぜ」

「本番だぜ」

麻紀子が彼等の教室に入って来たところでクラスメイト達の言葉の調子が変わった。

「さてさて、どうなるか」

「見物だな」

「気軽に言っていればいいさ」

彰浩もかなり開き直ってもいた。

「どうせ他人事だしな」

「そりゃ俺達はなあ」

「なあ」

彼等はここで顔を見合わせ合って笑うのであった。

「義理チョコ組だし」

「彼女なんていないし」

「むしろ羨ましいっていうのか」

「そうさ。わかったらさあ」

「観念するんだな」

「だからそれはわかってるさ」

彰浩はその顔に憔悴だけでなく無然としたものまで入れてきた。

「それじゃあ。いざ」

何だかんだで腹を括った。その前に麻紀子がやって来ていた。満面に笑顔を浮かべてその両手に何かを持って彼の前に来るのであった。

「お早う」

「うん」

彰浩はまずは麻紀子のいつもの挨拶に応えた。

「今日は何の日か知ってるわよね」

「勿論だよ」

ここまでのやり取りはまずは予定調和であった。もう言うまでもないやり取りであった。

「バレンタインだよね」

「ええ。だから」

そうしたここまで話したうえで彼女はまた言うのであった。

「チョコレート。作ってきたわ」

「作ってきてくれたんだ」

「そうよ」

その満面ににこりとした笑顔を浮かべるのも予定調和である。バレンタインだけではないが誰にとっても非常に喜ばしい予定調和である。

「それがこれなのよ。はいっ」

いきなり切り札を出してきた。その切り札を。

「これ。よかつたら食べて」

「さて、逃げないといつても」

「勝負には勝てるかな」

さつきまで彰浩と話していたクラスメイト達は彰浩を見ながら咳くのであった。確かに彼も憔悴しきっているがそれが彼だけではなかった。見れば麻紀子にもまた憔悴が見られる。それがチョコレートを作ったせいであることは一目瞭然であった。何しろバレンタインだからだ。

第五章

実は彼女は何日も徹夜して作っているのだ。だからその憔悴はかなりのものである。その憔悴の結果を今彰浩に対して切ってきたのである。バレンタイン唯一にして最強の切り札を今。

「うん」

そして。彰浩はそれを受けた。両手で彼女が差し出した大きな箱を受け取るのであった。

「もうここで開けていいかな」

「ええ、どうぞ」

その笑みでの言葉であった。

「それですぐに食べてくれるかしら」

「わかったよ。それじゃあ」

彼もそれを受けて箱に手をやる。それから開けると。中から様々な色のお菓子が出て来たのであった。

「お菓子!?!」

「チョコレートか!?!」

クラスメイト達はそのお菓子を見て思わず目を顰めさせた。彼等だけでなく箱を開けた彰浩もその目を点にさせているのだった。その目で麻紀子に対して問う。

「あの、これって」

「チョコレートよ」

しかし麻紀子にはにこりとした笑みのままであった。見ればボンボンの様に小さく様々な形でもある。蝶もあれば小船もある。非常に凝っていると言えた。

「色で驚いているのね」

「うん、まあ」

彰浩もそれを否定しなかった。しなかったというよりはできはしなかったのだ。

「そうだけれど」

「けれどこれはチヨコレートよ」

それでも麻紀子は言うのであった。

「食べてみればすぐにわかるわ」

「食べてみれば」

「味は折り紙つきよ」

麻紀子は絶対的なまでの自信を彰浩に対して向けてきた。

「だから。安心して」

「わかったよ。それじゃあ」

ここまで言われては彼も食べるしかなかった。やはりそれに加え最初から覚悟を決めているのが大きかった。その覚悟のままですは兎の赤いチヨコレートを手に取るのであった。そうしてそれを口の中に入れてみる。すると。

「あれっ」

「どうかしら」

「本当にチヨコレートだ」

そのことに意外といった顔を見せてきた。

「しかも中には乾燥させた林檎だね」

「そうよ。外見だけじゃないのよ」

麻紀子の笑みが会心のものになっていた。

「このチヨコはね。凝っているのは」

「そうだったんだ」

「他のも食べてみて」

すかさず他のチヨコレートも勧めてきた。

「さあ、どんどん」

「それってわんこそばだよね」

「だってどんどん食べてもらうから同じじゃない」

麻紀子の反論ではこうなるのであった。

「まあどんどん食べて、本当にね」

「わかったよ。じゃあ次は」

「この白いチョコレートなんてどうかしら」

見れば今度は白い猫の形をしている。白猫というわけである。

「ホワイトチョコだよ」

「そうよ。これはよく見るわよね」

「まあね」

そう答えてからその白猫のチョコを手に取ってみる。間違いなくそれはホワイトチョコである。白い猫の顔までそこにちゃんと作られている。

「顔まであるんだ」

「さっきの兎と同じでしょ」

確かにその通りである。兎にも顔が描かれているしこの猫に関してもそうである。こうしたところでもかなり凝っていると言えるのであった。

「これも」

「そうだね。それじゃ」

麻紀子の言葉に応えながらまたチョコレートを手取る。それを口に入れてみる。その中であつたものは。

「これは」

「シロップなのよ」

今度はクッキーであつた。

「それをホワイトチョコで包んでみたのだけれど」

「へえ、面白いね」

食べてみればこれはかなりいい。シロップの味が口の中を支配してそれが甘つたるい。これもまたかなり美味しいものであつた。

「そこの青い鯨はね」

「うん」

「パイナップルよ」

「ああ、それはわかるよ」

何故パイナップルなのかは彼にもわかつた。

「あれだよ、ブルーハワイからだよね」

「考えたけれどね。それにしたのよ」
「そういうことであつた。」

「それでオレンジのインコには」
「何かな」

「そのままオレンジ」
「今度はそれであつた。」

「黒い犬はそのままだけれどコーヒーを混ぜてみたのよ」
「全部色によつて違つんだね」

「緑のツリーは悩んだのよ、一番」
「緑のチヨコを指差して苦笑いを浮かべるのだった。」

第六章

「何を入れたらいいのかって。それで」

「どうしたのかな、これは」

そのツリーを手に取りながら彼女に尋ねる。

「中に入れたのはアーモンドよ」

「緑だけれど。ああ」

少し考えてわかったのだった。

「木からできるからかな」

「そういうことよ。それでいいかなって思ったけれど」

「いや、かなりいいよ」

彰浩もそれに同意して頷くのだった。

「美味しいよ、これって」

「そう言ってもらえると助かるわ。頑張ったかいがあったわ」

「美味しいよ。ただ」

「ただ？」

ここで話が変わるのであった。麻紀子もそれに顔を向ける。

「最初から気になっていたけれど」

「ええ」

「この色はどうなっているのかな」

それであった。話の核心であると言えるものであり彰浩も当然そこに話をやるのであった。

「ホワイトチョコはわかるけれど」

「アメリカ式よ」

麻紀子はにこりと笑ってこう言ってきた。

「アメリカ式！？」

「そう、着色料を使ったのよ」

そう彰浩に対して述べた。

「それで色をつけたのよ」

「チョココレートの中に混ぜて?」

「ニューヨークとかのお菓子はそうなのよ」

「こうも説明する。」

「ドーナツでもね。こうして色を着けたりするのよ」

「ドーナツってどうかさ」

「彰浩はふとあるお菓子を思い出したのであった。」

「何かマーブルと同じだよね」

「そうね。そういえば」

「麻紀子もそれを言われてふと気付くのだった。」

「このピンクの桃と同じ色もあるし」

「この中に入っているのは桃だね」

「そうよ。桃色だからそうしたの」

これは全く悩まなかったようである。やはりピンク色といえはそれしかない。そういうことであった。これも中々いい味になった。た。

「けれど。そうなるわね」

「そうだよね。考えたら同じよね」

「だけど味は全然違うでしょ」

少なくともマーブルとは全く違っていた。味だけでなくその外見もだ。

「美味しいでしょ」

「うん。確かに最初はかなり驚いたけれどね」

「それは彼も認める。」

「美味しいよ、本当に」

「黒いチョココレートじゃ何か面白くなかったから」

「麻紀子は微笑む。自信を漂わせた微笑みであった。」

「それで作ったのよ。けれど気に入ってもらえたみたいね」

「うん。確かに最初は驚いたけれどね」

「じゃあ成功ね」

「この言葉も実に麻紀子らしかった。」

「驚いてもらえたらね」
「やっぱりそれなんだ」
「普通のなんて全然面白くないじゃない」
「それに応える顔も平然としていた。」
「それでなのよ。私を作るチョコは絶対に」
「普通のじゃないんだ」
「そういうこと。わかっていたんじゃないの？」
「まあね」
「それは事実だ。だから何が出るか怖くて仕方がなかったのである。
「けれど。美味しかったよ」
「美味しかったの」
「塩とか入っていたらって思うと。それがなくて」
「美味しさも普通にはしないわよ」
「それについても決して普通を目指しはしない麻紀子であった。
「私はね」
「それはいいかな」
「いいでしょ。じゃあホワイトデーにはね」
「話が一ヶ月先のことにまでいつていた。
「また楽しみにしておいてね」
「ちよつと待つて」
今の言葉にふと気付いた。それは。
「楽しみにつて。ホワイトデーは」
「だから。今度はマシユマロよね」
「そうだけれど」
話が噛み合わないのを感じていた。それは何故かというのかわか
っていた。
「ホワイトデーって普通男がお返しするものだけれど」
「だから。普通じゃないのよ」
ここでまた麻紀子は言うのだった。
「私が普通にするわけないじゃない。だから」

「またプレゼントしてくれるんだ、僕に」

「そういうことよ。それじゃあ」

話が動く。一ヶ月先に向かつて。

「その時も。楽しみにしておいてね」

「わかったよ。まあ何が起こるかは」

「その時になつてわかるわ」

とりあえず今はそのカラフルなチョコを楽しむだけであった。だが一ヶ月先に何が起こるかを考えると。どうにもこうにも不安になるがそれを何とか抑えてチョコレートを楽しむのであった。

バレンタインは一色じゃない 完

2008・1・10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6089d/>

バレンタインは一色じゃない

2010年10月8日15時04分発行